

# 夏休み「そこ」居場所

経済的に困窮するなどの理由で養育が行き届きづらい家庭の子どもを対象に、学習や食事、入浴といった支援をする「子どもの居場所」。子どもが家庭で過ごす時間が長くなる夏休みは、より重要性が増している。親が仕事に出かけるなどして孤食になりがちなことに加え、旅行など「体験の格差」も生じやすいとされ、県内の「居場所」も工夫を凝らしている。(島野剛、石田聡)

## 県内団体 子ども支援

### 体験にも工夫凝らす

訪れる。この日は、JR今市駅近くに移転して間もない「新居」に小学生から高校生までの男女5人が集まり、宿題をやり、

別の日には川遊びも。病気の父親と2人で暮らす小学5年男児(11)は、天然のウォータースライダーで何度も遊び「こんな子どもの居場所を開いた。地元の西那須野ロータリークラブの援助を受けて、洗い場、冷蔵庫などを備えた食堂を整備。毎週水、土曜日に、ひとり親家庭などの子どもたちを受け入れている。同クラブのメンバーが経営する食品会社が流通に適さない食材などを提供し、子どもと一緒に

遊び、食事をし、入浴してから帰宅した。夏休みは、お出かけが増える家庭が多いが、

「家庭の境遇について子に責任はない。子どもは地域で育てるもの」と同クラブの角橋徹会長(60)。

「すくすくきれい」「割れないで飛んでいく」夏休みに入って間もない平日の夕方、日光市の認定NPO法人「だじようぶ」が市の委託を受けて運営する居場所「ひだまり」。子どもたちは外で、手作りシャボン玉に興じていた。

「食卓も囲む。「家庭の境遇について子に責任はない。子どもは地域で育てるもの」と同クラブの角橋徹会長(60)。



小雨も気にせず、「居場所」のスタッフと手作りのシャボン玉に興じる子どもたち11月7日、日光市内

「経済的な理由などで、そうした経験を積めない子どもも多い」という。夏、昼食を提供する「子どもは多い」という。人キッズシエラターは今那須塩原市のNPO法人キッズシエラターは今年、夏、昼食を提供する「子どもは多い」という。

流しそめんや近くの幼稚園の夏祭りに参加するなど、夏休みならではの仕掛けも盛り込む。キッズシエラターの森野百合子理事長(56)は「地域に支えられている。子どもが安心して夏休みを暮らせる場を提供したい」と話している。